

神さまが宿る枝

荻原 純子 福島県福島市 三十二歳

祖父の庭は、さながら盆栽の森だった。
松、姫りんご、サツキにカエデ。

幼い私にとっては、まるで昔話の森の中だった。

そして盆栽の中にひとつ、神さまがいた。

「ごらん」

祖父は小さな松の盆栽を手を取った。

「ここに『神』がある」

それは、傷ついた松だった。

枝がひとつ枯れ、白い中身がむき出しになっている。

「これが神さま？」

祖父は満足げに頷いた。

神は盆栽用語だった。

枯れて樹皮が剥がれ、中身の白色が剥き出しになること。

枝で起こったものを神（ジン）と呼ぶのだと祖父は言った。

傷に神さまが宿る。

幼い私は、そう思った。

そうして大人になった私は、至るところで神さまを見かけることになる。

東日本大震災の後。

どこもかしこも、誰も彼もが傷ついていた。

震災の後、数年ぶりに祖父の庭へ足を踏み入れて驚いた。

松に宿っていた神さまは居なくなっていた。

樹皮が盛り上がり、苔が生え、松は傷を癒やしていた。

ふと、思った。

神さまは、傷が癒えると去っていくのだ、と。

残されたのは、青々と茂る一本の松。

「生きている」

背筋を伸ばし、震災で荒れた庭を眺め呟く。庭は、傷ついた福島にも似ていた。

割れた鉢植え、崩れた土、折れた枝たち。すべてに神さまが宿っている気がした。

けれども私たちは生きて、もがく。

最後にあるのはむき出し傷じゃない。生い茂る命の緑なのだと、私は祖父の庭で知ったのだ。